

ファッションと環境

取材のため2泊4日という弾丸ス

ケジュールでフランスに行きました。

パリでの仕事を中心でしたが、パリ

郊外のヴェルサイユ宮殿にも出かけ

ました。

パリの街並みは建物の高さも質感もそろい、統一感

が保たれています。工事現場の場

所は青いビニールシートではなく、美しい写真がプリントされたシートがかけられ、街全体の美観

を損ねないような工夫が凝らされています。同じ配慮はヴェルサイユ宮殿でも見られました。工

事部分には完成後の建物とおぼしき絵が描かれたシート

がかけられ、工事現場にありがちなむき出し感を見せない気配りが行き届いていました。

パリの人々のファッションセンス

というのには、こうした環境のなかで育まれるものと納得しました。周囲の美観を損ねない配慮

をする。自分も環境の一部を構成するのだと自覚して、

景観の美しさに貢献しようとする。そのような心の態度

が、パリの人々のシックな装いや背筋を伸ばした歩き方に無意

識のうちに反映されているように思えました。

ただ、パリでは喫煙者が煙草の吸殻をポイ捨てするし、犬の

飼い主は犬の落とし物を放置していったりもします。貧富の

差は大きく、高級ホテルで長時間ランチを楽しむ富裕層もい

れば、路地裏で小銭を請う人々も少なくありません。必ずしも完

壁にすばらしいところばかりではないというのは、どの国も同じ

です。

貧富の差を考えるにあたって、「富」の頂点として見学したのが、ヴェルサイユ宮殿です。フラン

ス革命前のフランス王室の富のレベルがどれほどだったのか、想像をはるかに超えたゴージャス

な宮殿からうかがい知ることができました。外観のみならず内

部の天井、壁面、床にいたるまで、高度な装飾技術や美術品で二部

の隙もないほど飾り込まれた宮殿。このような空間のなかでこ

そ、パニエでスカートを広げ、髪を高く結び上げてさらにオブジ

エを載せるといった度はずれたファッションが可能だったわけ

です。身体を極限まで飾り立てた革命前の宮廷服もまた、環境に

とけこむ配慮がなされた装いだつたのだと理解しました。

ほど広がる宮殿の庭に、「隣家」などありません。見えるのは王家の領地ばかりで、この中でこ

く限られた人間が着飾り、宮廷生活を営んでいたわけです。さ

さやかなじめをしたたりゴシップをばらまいたりするのがせめ

ても、の憂さ晴らしという人間関係のなかで、オーストリアから14

歳で嫁いできた王妃マリー・アントワネットは、広い牢獄に閉じ

込められたような孤独を味わっていたのではないだろうかと思

像しました。

贅を尽くした空間で、豪華に着飾り舞踏会、晩餐会、音楽会。その栄華も革命とともに露と

消え、その名残であるヴェルサイユ宮殿は現在、世界中からの観光客で大にぎわい、汲めども尽

きぬ利益の源泉となっています。こうして後代のフランスの観光

資源となったことを思うと、当時の王家の「浪費」は後代への

「投資」だったとみなすこともできるわけですね。

ともあれ、装いは、周囲の環境とセットで考えるべきと学んだ

旅となりました。翻つて、日々の服選びにおいても、景観の一部

となり環境に貢献するという態度で臨むことで、いわば社会貢献

としてのファッションセンスが養われていきそうではありませんか。

なかの かおり

1962年生まれ、富山市出身。株式会社Kaori Nakano代表取締役。服飾史家・エッセイストとして研究・講演・執筆をおこなうほか企業の顧問教授を務める。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書『紳士の名品50』（小学館）、「モードとエロスと資本」（集英社新書）ほか。監修した新刊「服を味方にすれば仕事はうまくいく」（ディスカヴァートゥエンティワン）が発売。

